

令和3年度 第1回教育課程編成委員会

日 時：令和3年10月29日（金）20：00～21：00

場 所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：長尾 博、松本逸郎、西 啓太、有福浩二、大坪 建

 分部哲秋、韋 傳春、岩永隆之、早野和之、林 勇一郎、荒木一博

司 会：韋 傳春

1. 出席者紹介

2. 校長挨拶

・入試の状況報告

令和3年10月9日 指定校推薦、推薦入試が行われた。

PTOT 合わせて50名の合格が決まった。

昨年と比較して10名少ない。あと14名入れば8割。この後の一般入試に期待したい。

3. 前回会議後の報告

・前期の状況報告

授業：4月22・23 日臨時休校（濃厚接触者）

5月6日～5月29日 対面とオンライン併用（県独自の緊急事態宣言）

6月28日 臨時休校（陽性者）

6月29日～7月3日 オンライン

実習：3年 5月10日～5月31日 学内実習（4w/8w）

2年 9月27日～10月16日 一部の学生が学内演習

解剖実習：8月16日～20日 学内演習

4. 開会

当委員会第6条の規定による出席数を満たしており、本委員会は適切に成立していること確認する。

5. 委員長選出

委員長は、分部哲秋校長で進めさせて頂く。

6. 審議事項

林) 本校のオンライン授業対応における学生の成績状況について

本校は昨年からiPadを導入するにあたり、タイミングよく新型コロナウイルスの影響でオンライン対応することになった。昨年の傾向や今年の傾向、そしてオンラインを全く経験していない学生の状況をみたときに多少学力や学生の質に違いを感じたので、今回簡単な集計をとってみたいことにした。世間一般的には「オンライン授業は効果がないのではないかな。また学力を下げるとはではないか」という意見があるが、大学等の研究では非常に効果が高いという結果も出ている。オンライン授業はアクティブラーニングに親和性が高いとも言われ、学習意欲が高い学生にとっては効果的に機能していくという結果も出ている。そこで本校でもオンラインを経験した昨年の1年生と今年の1年生と全く体験していない2年前の1年生について授業の満足度と定期試験の素点の平均値の比較を行いICT教育の効果を調べてみた。

授業の満足度（※2020年、2021年はオンラインを行った科目に限定した授業の比較）について

は年々高くなっている。オンライン授業によって満足度が低下する科目はなかった。オンライン授業は学生の満足度を下げるものにはならない。ポジティブな意見としては「授業の資料がハッキリ見えてわかりやすかった」「ホワイトボードを使っているのもわかりやすかった」などがある。ネガティブな意見としては「わからないところをすぐに聞けない」「電波の都合で聞き取れないことがあった」「わからない時に隣にいる学生に尋ねることができない」という意見があった。一緒に行わせる活動にはオンライン授業は弱い部分もあると感じている。

定期試験の平均点の分布についてはオンラインの経験がない 2018 年度は正規分布であるが、その後は少しずつ平均点と中央値のずれがみられ成績の分布が幅広くなっている。また 2020 年度入学者の 1 年次と 2 年次の比較では 2 年次になると中間層が右方へ転移し成績の良い群が増えているが、成績の低い層は孤立化している結果になっている。意欲的な学生がオンライン授業によって良い方に引き上げられたと推測される。1 年次（前期）平均点の分布では現在の 1 年生も例年と差はなく後期の関わり方次第で変化すると思われる。

まとめとして学習意欲の高い学生に対してオンライン授業は効果的である。また対面授業とオンライン授業の組合で行うことにより効果的な授業展開が期待できる。しかし仲間や教員とのふれあいの減少がネガティブな印象を与えるので、分散登校や時差登校であっても仲間との交流を意識した学校行事やクラス運営を検討していくことが重要である。

草) この報告に対してご質問を頂きたい。

松本) チームを作ることが効果的である印象を受けたが、チームはこちらからの働きかけはなく、学生だけで作ったのか。

林) こちらから働きかけたチームもあるが、私が ICT 管理者として見てきたときに沢山のグループが学生だけで出来ている。プライベートでもチームを作っており、学科問わずいろんな情報交換をしている感じがする。そう考えると主体的に動ける、計画性がある学生はどんどん付いてくる仲間を作っていく、同等の情報交換を行い、その情報がクラウドデータで管理できるため、すごい豊富な情報量になってくる。そこで良い情報交換ができて学習効果が上がっているのではないかと思う。しかしそれに入れていない集団もいる。そういう集団は iPad の使い方も危うい。

松本) ひとチームは何人くらいいるのか。

林) だいたい 5～6 名である。しかし学校で作っているグループは非常に大きくひとクラス単位であり、どちらかという授業の資料を配布するような使い方なので、グループワークを展開していくためのチームの作り方も教員が考えていかなければならないと考えている。

松本) 国試対策もチームでやっているのか。

林) 今回国試塾セミナーをオンラインで実施したが、オンラインで 1 対 1 のペアを組む場合と 6 人 1 グループでやっていく場合と色々なバリエーションがあり、予想以上にグループワークの展開が良くて効果的だと感じた。集団で集めるとか小グループにするとか、1 対 1 のペアにするとか、教員の方でそのコントロールをするが、そのあとの展開は学生に行わせ、教員はモニタリングしていく形の方法であった。そこが有効的であったと感じた。

松本) 学生が自ら作ったチームで、先程の成績表の横軸で良い方には 80 点以上の学生が 10 数名居るが、その人たちは均等にどこかのグループに分かれているのか。それとも特定のグループに集まっているのか。

林) グループの偏移というところまでははっきりと把握してはいないが、多分情報をしっかりと掴んでいる学生が各グループには所属している傾向はあり、成績が上位ではない学生が仲間に入れてもらう形でグループが作られているのではないかと思う。

松本) その成績上位者の10数名の使い方、運用の仕方で大分全体の力が上がっていくのではないかというのとは決定的なような気がする。

林) 組み合わせて全体を引き上げるというのは大事であると思う。

松本) 学生同士の気持ちでグループが出来上がるのは基本的には大事なことはあるが、そうすると学生の気持ちに影響する学校の校風が反映するのではないかと思う。できる学生で集まりすぎるのではないかということも気になる。

林) 教員が介入していないグループに関しては集まりすぎているのではないかと思う。またオンライン授業もいろいろなグループワークを多用した授業展開がまだまだ私たち教員も出来ていないので今後の課題であると思う。アクティブラーニングを用い主体性を引き出すような授業展開を対面でもオンラインでもできるようにするのが次の課題であると感じている。

松本) 不幸にしてなのかわからないが、新型コロナウイルス感染症によって授業が強制的に変わらざるを得ない状況になった。必ずしもそれが全部悪い方向にはなっていない印象を受けた。学校の気風を高め最終的には国試合格や成績向上につながればよい。

林) 良い報告ができるように頑張りたい。

長尾) 満足度と成績との相関が高いと思うが、不満足な人の中で果たして成績が良い学生がいるのか。また2極化と言っているが現実的に考えた場合1極化だと感じる。成績の低い学生に関してはどんな対処をしても難しい面もあると思う。また、この方法を使ったグループが国試の合格率が本当に高くなるのか、これは将来見据えないといけない。

大坪) 良く機能するグループは進行役(司会)が居て上手く回ると思うが、そういう人たちがいないグループはなかなか上手く回らないということがある。その場合ファシリテーターの意見や進行支援が必要ということがあったが、こういう学生の場合は上手く回らないグループの場合は先生方のファシリテートは行われるのか。

林) 国試塾セミナーの中で滞ったグループに関しては、手順の見直しや声を出させるとか、しっかりと文字を書きながら説明しなさいと助言を与えた。またルールの再確認などをさせた。さらにそれでも話せなかった場合にはさらに助言を与え介入した。ただ今回、成績の高い学生と低い学生との組み合わせで行ったのだが、そうすると高い学生ばかり話して低い学生がどんどん依存的になってしまった。また高い学生はイライラ感が募り活動が雑になることがあった。そのことからペアを考える場合、高い学生と低い学生の差が僅差になるほうが良いと感じた。僅差であるとお互い惹かれるが、差がありすぎると展開が上手くいかない。教員のアドバイスよりも組み合わせが非常に大事であると考えている。

大坪) オンラインでのグループワークも世間的にまだ慣れてないところがあり、いち視聴者になりがちになるという傾向もある。そこではルールづくりも大切である考える。将来的にもオンラインでのグループワークは続いていくと思うので、よい経験をされたと感じる。

西) 私もオンライン授業も担当する事があり、今回まとめていただいて非常に勉強になった。質問だが、学生側の画面は顔出しをさせているのか。

林) 先行文献では効果が高い要因あるいは効果を高くするためにはカメラをオンにすることが必要とされている。カメラをオンにしない場合は集中が下がり、参加しない者が増える。カメラをオンにするだけで1対1の感覚になり集中力が上がるとされている。そのためオンラインではカメラをオンにして双方向性を活かす必要がある。さらに意見が言いやすいようなツールを使うことも必要である。本校でもチャットか Google form を使用し、出来るだけ授業中に質問等を受けるようにした。

西) 教員側の満足度につながると思うが、顔を出さないオンラインの場合、一人で話している気持ちになる。どれくらい内容が伝わっているか手ごたえも感じない。またオンライン上での試験も実施したが、結果としては全員似通った点数を取った。しかし対面でのテストでは結果はそれなりに分散した。その場で解くようにオンラインでは工夫したが背景にはいろいろと考えさせられた。オンラインでのテストは難しいように感じている。

章) 大学では顔を出さなくても良いという理由には何かあるのか。

西) 教員側の判断に任せてある。学生への配慮も教員側にあって強制していない。あらかじめルールを前もって作っておくことが重要だと感じる。

林) 昨年度は自由にさせていたらカメラオフが普通になっていった。今年は基本的にカメラオンすることを原則にさせた。またバーチャル背景も使用を控えさせた。そういう条件付けは大事だと感じる。

有福) 2020年に入学した学生の中で成績の低い学生が数名いるが、今後はグループを解散して作り直すということをするのか。

林) 冒頭で話したチームは学生間で任意でできたグループであるので、学校の教育の一環としてグループを作り直すことは考えている。勉強はそのグループでやろうという習慣ができていくと良い。

松本) 先程のデータで成績の真ん中にいる学生が少し上位の方にシフトをしていたということには、新型コロナでこれからどうなるのかということに対する自分たちの将来も含めた危機感が学生の間にも教員の間にもあって、その危機感がひよっとしたら右方シフトになった原因かもしれないと感じた。

林) 前回の会議の中で身体的、精神的健康観を報告させていただいたが、様々な行動制限によって実習に対する不安感や将来に対する不安がみられた。そういう意味では何かしないといけないという思いを募らせる学生もいて、頑張っって良い方に移行したということもあるのではないかと思う。

松本) 国家試験のことを考えたら成績が真ん中の群を右側(良い方)に移っていくような働きかけが全体を引き上げていくムードになると思う。

7. 総評

校長) 成績が低い学生を引き上げるためにも、中間の層に力を入れていきたい。またそのためには学生間の友人関係も必要であるので、今後も努力していきたい。

8. 閉会

章) これを持ちまして第1回教育課程編成委員会を閉会する。

9. 謝辞

校長) 出された様々なご意見を参考に改善していきたい。ありがとうございました。

次回の教育課程編成委員会は令和4年3月25日(金)20:00を予定する。